



vol.1 庄内地方唯一の周産期母子医療センター

庄内病院は地域の中核病院として、他の医療機関と連携しながら、高度かつ良質な医療の提供と、心の籠もった患者サービスに努めています。

この連載では、医療の身近な疑問に、庄内病院の様々な診療科の医師がお答えします。1回目は小児科と産婦人科です。赤ちゃんとお母さんの双方にとって、安全なお産を最優先に行える施設である、新生児集中治療室（NICU）を備えた周産期母子医療センターを担当する診療科です。

○問合せ 庄内病院総務課 ☎26 - 5111

広報 つるおかの 医療相談



庄内病院の医師が 疑問を解決！

小児科

熱性けいれんって どのような病気？

3歳の子供が夜中に39度超の熱とひきつけを起こし、救急外来で診てもらったら「熱性けいれん」と診断されました。詳しく教えてください。

熱性けいれんは、生後6か月から5歳くらいまでのお子さんに見られる、発熱に伴うけいれん発作です。子供のけいれんでは最も多く、日本では約10人、20人に1人の割合で見られます。発熱に伴ってけいれんを起こす疾患は熱性けいれん以外にもあるため、特に初めてけいれんを起こした場合はすぐに受診が必要です。また、①けいれんが5分以上続く、②けいれんが止まっても意識が戻らない、③唇の色が紫色で顔色が悪い、のいずれかに当てはまる場合には救急車を呼びましょう。

熱性けいれんを起こしたお子さんの3人に1人は熱性けいれんを繰り返すため、けいれんの対処法を知ることが大切です。慌てずに静かに寝かせ、顔を横向きにします。これは、吐いた物が喉に詰まらないようにするためですが、口の中にタオルなどを入れることも窒息の原因となるため、避けましょう。熱性けいれんを繰り返す場合、抗けいれん薬の投与が必要になる場合があります。

庄内病院の小児科

庄内地域唯一のNICUを有する新生児医療の拠点です。重症新生児や重症小児の診療が最も重要な任務ですが、各領域の専門医が在籍し、専門性の高い小児医療を提供しています。お子さんの症状にお悩みの方はご相談ください。



小児科医師 齋藤 なか

産婦人科

子宮頸がんの予防 ワクチンって安全ですか？

14歳の娘がいる母親です。子宮頸がんの予防にはワクチン接種が有効と聞きましたが、副反応が心配です。ワクチンを打たせて大丈夫でしょうか。

日本では毎年、1万人以上の女性が子宮頸がんを発症し、約2,900人の方が亡くなっています。また30歳台までに治療で子宮を失ってしまう（妊娠できなくなる）方も、毎年約1,000人います。

庄内病院の産婦人科

ご覧ください。ホームページにも掲載されています。



発行 労働省 厚生省 リーフレットのこちら

子宮頸がんを引き起こすヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチンを接種することで、50%〜70%の確率で発症を予防することができるとされています。80%〜90%の予防効果があるワクチンも開発されています。

ワクチン接種の副反応として、接種した箇所の痛みや腫れ、赤みなどがあります。呼吸困難やじんましんなど、重篤な症状は、1万人当たり5人〜7人と報告されています。子宮頸がんの予防効果等のメリットが、副反応等のデメリットより大きいことが確認されているため、ワクチン接種を勧めています。

詳しくは厚生労働省発行のリーフレットをご覧ください。



産婦人科医師 五十嵐 裕一